

ともに語り合い、考え続けるための冊子

ねやがわ スタンダード (ver. 7)

～学習習慣の定着と生徒指導観の共有に向けて～



寝屋川市教育委員会
ねやがわスタンダード研究部

Updated on February, 2026

朝、
教室に入ってくる子どもたちの表情。

いつも通り、元気がいい子。
どこか、不安そうな子。
何も言わないけれど、気になる子。



私たちは毎日、正解のない問いの中で、
子どもたちと向き合っています。

「この声かけて、よかったらどうか。」
「もっとできることが、あったのではないか。」
「あの子の『今』を、ちゃんと受け止められただろうか。」

迷い、立ち止まり、ともに考えながら——

ねやがわスタダードは、
教職員一人ひとりが
「迷いながら、立ち止まり、ともに考え続ける」
ための土台です。

答えを押しつけるものではありません。
やり方をしぼるものでもありません。

「立ち返る場所」として。
「語り合う共通言語」として。
このスタダードがあります。



ねやがわスタンダードって…

ねやがわスタンダードは、寝屋川市の目指す子ども像である「考える力を身に付けたたくましく生き抜く子」を育むために、市内全教職員で共有したい、生徒指導観・授業観を示したものです。

加えて、実践をより豊かなものとするためには、私たちの「あり方」についても考える必要があります。ねやがわスタンダードでは、内省と対話をキーワードに、「同僚性」「教師の学び」といった全ての土台についても示すことで、自己（自校）の「あり方」について自分事として問い続けることができるようになっています。

1 寝屋川の実践と秋田・石川・福井での学び

視察

寝屋川市が大切にしてきた実践、
そして、秋田・石川・福井での学びと
対話を通して整理してきた、
子どもたちを育むための「土台」です。



2 「やり方」と「あり方」

やり方

あり方

「子どもたち一人ひとりが、安心して学び、伸びていくために」
「先生一人ひとりが、迷いながらも挑戦し続けられるために」
「学校全体が、『チーム』として子どもを支えるために」
ねやがわスタンダードでは、
「やり方」と「あり方」それぞれを大切にしています。

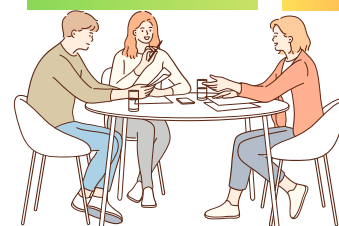


3 みんなで問い続け、考え続けていくために

問い続ける

対話

画一的な指導を求めるものではなく、土台です。
各学校の実態に応じて、
教職員同士が対話を通して重点を定め、
工夫し、発展させていくことを大切にしています。



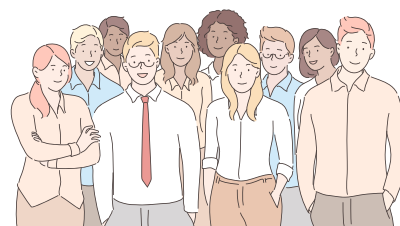
4 「チームねやがわ」であるために

対話

共通言語

宝物

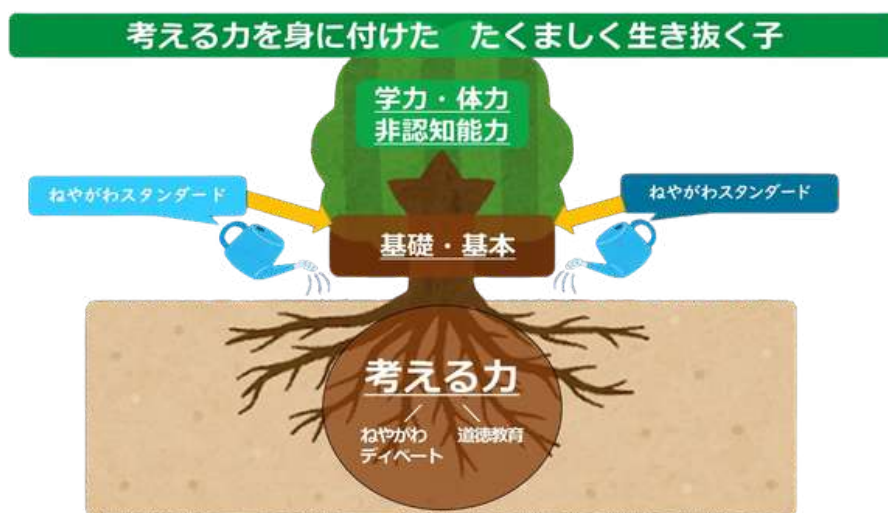
このスタンダードは、開くたびに、
「新たな気づきがあり」
「語り合いが生まれ」
「実践が深まっていく」
そんな、子どもたちを育む宝物です。



寝屋川市の目指す子ども像

「考える力を身に付けた
たくましく生き抜く子

寝屋川教育が目指す教育のイメージ図



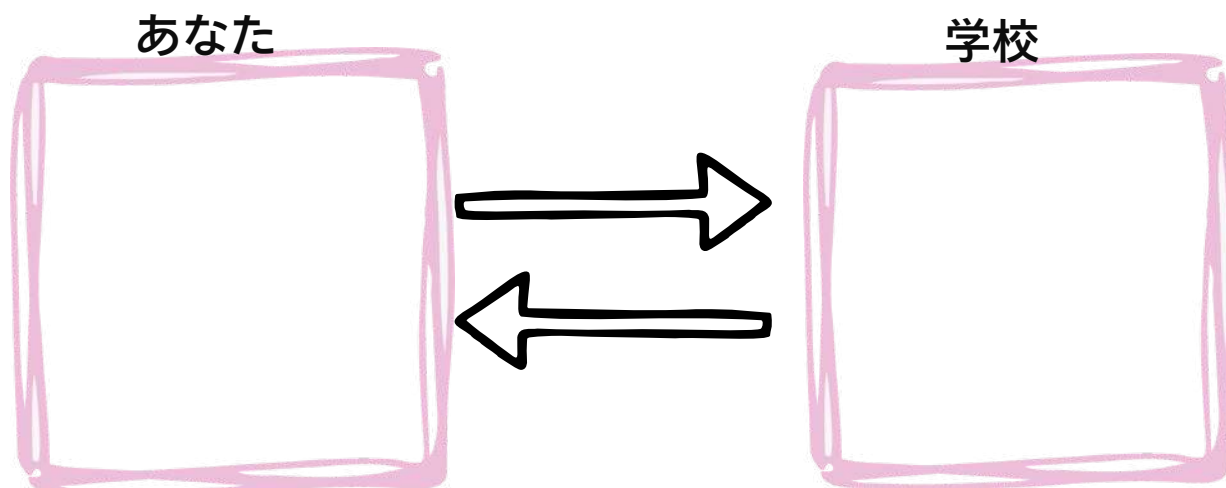
どんな教師・学校でありたいですか？

「私たちのあり方」から考えてみませんか

あり方

対話

子どもたちと向き合うときに唯一の「正解」はありません。しかし、自分たちのあり方を問い直し、何を大事にしていきたいのかを語り合うことで、「これから」を創っていくことはできます。「やり方」からではなく、「私たち（学校）のあり方」から考えてみませんか。



スタンダードをどんな場面で使う？

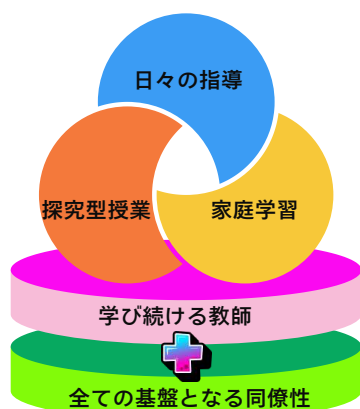
- 校内研修で、「何を大切にするのか」語り合うとき
- 相互授業参観で、実践を振り返り、学び合うとき
- 小中一貫教育の中で、指導観をつないでいくとき
- 日々の指導や授業を、ふと立ち止まって見つめ直すとき
- 初任者や転勤者と、思いを共有するとき
- 他校の先生と実践を語り合うとき etc.

このスタンダードがあることで、校種や学校が違って、経験年数が違って、「同じ言葉で、同じ方向を向いて語り合う」ことができます。

ねやがわスタンダードは、完成形ではありません。
先生、そして子どもたちに関わる全ての職員一人ひとりが
迷い、語り合い、実践を積み重ねる中で、
これからも育っていくものです。
どうか、一人で抱え込まないでください。
どうか、立ち止まり、語り合ってください。

このスタンダードは、
そのための「共通言語」です。

共通言語



ねやがわスタンダード5つのテーマ

このスタンダードは、「同僚性」「学び続ける教師」「日々の指導」「探究型授業」「家庭学習」の5つのテーマで構成しています。

これらは、市内全教職員で大切にしたい視点です。

目次

01 すべての基盤となる「同僚性」

#あり方

- (1) 「同僚性」とは・・・・・・・・・・・・ 5
- (2) 「同僚性」を高める6つのポイント・・・・ 6
- (3) 心理的安全性・メンタルヘルス・・・・ 7

02 学び続ける教師

#あり方

- (1) 私たち教師はこれからどう学ぶ？・・・・ 8
- (2) 「学び」をどうデザインする？・・・・ 9
- (3) 「やり方」と「考え方」そして「あり方」・・ 9
- (4) 「新たな教師の学び」に向けた試行錯誤・・ 10

03 日々の指導

#考え方

#やり方

- (1) 子どもたちに寄り添った指導・・・・ 12
- (2) どの教室でも方向性を揃えた指導を・・・・ 12
- (3) 指導のルールやレイアウトを問い直す・・・・ 13
- (4) 掲示の工夫～教室全体をあたたかい雰囲気へ～ 14

04 探究型の

「ねやがわ授業スタイル」

#考え方

#やり方

- (1) 考える力を育む子ども主体の授業へ・・・・ 15
- (2) 学習の流れに関する指導のポイント・・・・ 16
- (3) 授業を充実させるポイント・・・・ 20

05 家庭学習で

生涯学び続ける力を

#考え方

#やり方

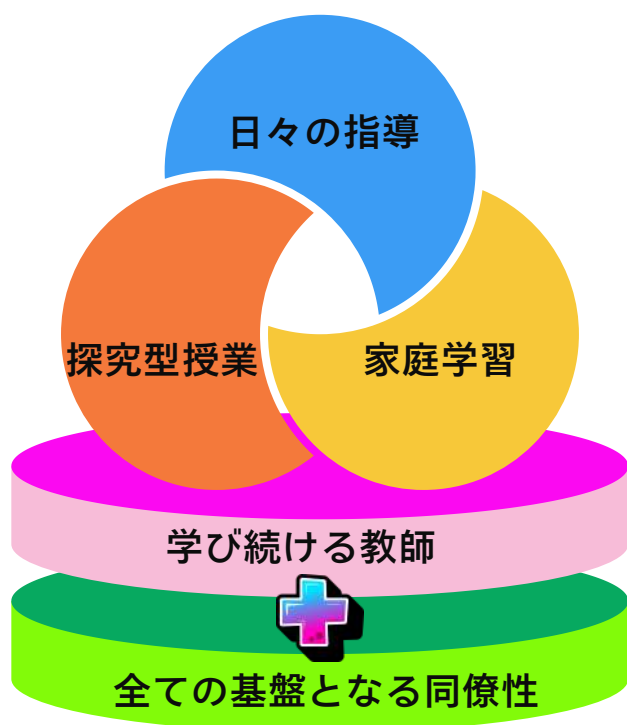
- (1) 家庭学習は何のため？・・・・ 29
- (2) 家庭学習ノートの取組・・・・ 29

巻末 参考資料

寝屋川市ユニバーサルデザインの授業づくりシート
幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿
ねやがわスタンダード セルフチェックシート

— 01 すべての基盤となる「同僚性」 —

（１）同僚性とは・・・



多様な課題に直面する中で

忙しい毎日の中でも、「これでよかったのだろうか」と一人、思い悩み、立ち止まる瞬間はないでしょうか。

それなのに、目の前の子どものこと、保護者対応のこと、学級や授業のことで、誰にも相談できず、胸の内にしまい込むこと。そんな時、ありませんか？

学校の教育活動は、一人の力だけで成り立つものではありません。組織的かつ効果的に子どもたちを支えていくためには、教職員どうしが互いに支え合い、互いの専門性を認め合い、高め合う「同僚性」が、学校の土台になります。

チーム学校が動き出すとき

様々な立場の教職員が、それぞれの強みを生かしながら関わる学校だからこそ、大切なのは、

「困ったときに『助けて』と言える。」

「迷ったときに『どう思う？』と聞ける。」

「うまくいかなかった実践を、話せる。」

そんな関係性があるとき、学校は少しずつ「チーム」になっていきます。

つながりが、実践を育てる

同僚性が高まると、学校の風景は変わっていきます。教職員一人ひとりが、学校全体の課題や取組を「誰かの仕事」ではなく、「自分のこと」として考えられるようになります。互いの実践を語り合い悩みや工夫を分かち合う中で、新しい視点や気づきが生まれ、実践は少しずつ、確かに深まっていきます。

同僚性とは…

仲良くすることでも、全てのやり方をそろえることでもありません。

それぞれの違いを認め合いながら、支え合い、聞き合い、共に学び続ける関係です。

「一人でがんばらなくていい。」「迷いを言葉にしてい。」そんな文化を、これからも大切に共に育てていきましょう。



(2) 同僚性を高める6つのポイント

～これまでの寝屋川市の実践と、秋田・石川・福井視察を通した気づき～

① 「そもそも何のため？」

日々の忙しさの中で、手段が目的になってしまうことはないでしょうか。そんなとき、立ち止まって問い直したいのが、「そもそも何のために、これをしているのか」「私たちは、どこに向かおうとしているのか」という問いです。

学校教育目標や目指す子ども像に立ち返り、思いを共有する時間をもつことは、教職員どうしが同じ方向を向き直す、大切な機会になります。

② 対話と内省を、日常の中に

同僚性は、自然に生まれるものではありません。対話が生まれる「場」と「きっかけ」を、意図的につくる必要があります。

教育書コーナー、板書写真の共有、学級通信の交換、別冊対話ノート——小さな取組でも、

「考えを言葉にする」「他者の実践に触れる」機会が増えることで、内省は静かに、しかし確実に広がっていきます。

③ とともに学び続ける

校内研修、校内研究、相互授業参観、研修資料の共有。こうした取組は、教職員どうしがつながり、語り合うきっかけになります。

同僚性とは、互いの専門性を高め合うことです。「学び続ける教師」と「同僚性」は、学校を前に進める車の両輪です。

④ 多様な関わり

学年や教科を越えた取組、ペアティーチングやコーチングなど、多様な関わりが生まれる仕組みは、同僚性を育てる大きな力になります。

一人で考える時間も大切ですが、みんなで考える場があることで、見える景色は広がり、判断の質も高まっていきます。

⑤ とともに振り返り、 現在地を確かめる

取組は、いつも思い通りに進むわけではありません。うまくいったことも、うまくいかなかったことも、立ち止まって振り返ることで、初めて次につながります。

「進んでいないようで、ちゃんと進んでいた」

「気づかないうちに、成長していた」

そうした現在地を確認することは、次の一歩を支えてくれます。

⑥ とともに子どもの成長を喜ぶ

教職員同士が、日常的に子どもの話をし、悩みを共有し、成長を喜び合うことが一番のチームワーク。

「この子、こんな姿を見せてくれた」

「前より、ここが伸びている」

そんな会話が自然に交わされる中で、学校は子どもをど真ん中にしたチームになっていきます。

（３）心理的安全性・メンタルヘルス

「この場では、安心して本音を出していいと思えること」

失敗や迷いを話しても、責められない
 分からないことを「分からない」と言える
 立場や経験に関係なく、意見を出せる
 困ったときに「助けて」と言える
 つまり、「黙って我慢しなくていい空気があること」



「人間関係のため」だけのものではなく、教育の質を支える土台



心理的安全性がある職場では、互いが思いが尊重され、挑戦しやすくなり、学び合いが起こります。

「授業がうまくいかなかった話が、学びになる」

「迷いを共有することで、指導が深まる」

「一人で抱え込まず、チームで子どもを支えられる」

これらは教育を支える土台となります。

対話

市内全教職員をつなげる

共通言語＝「ねやがわスタンダード」

校種が違って、勤務校が違って、取組が違って、それらを貫く「共通言語」としての、「ねやがわスタンダード」の理念・視点があることで、対話が成立し、それぞれが自分ごととしてとらえ、新たな気づきを生むことができます。

そして、これらは市全教職員の同僚性の高まりにつながります。



02 学び続ける教師



(1) 私たち教師はこれからどう学ぶ？

「教師の学び」と「子どもの学び」は相似形

「子どもたちがどう学ぶのか」「子どもたちにどう教える（支援する）のか」ということを突き詰めて考えていけば、おのずと教師自身の学びについて、問い直すことになりま

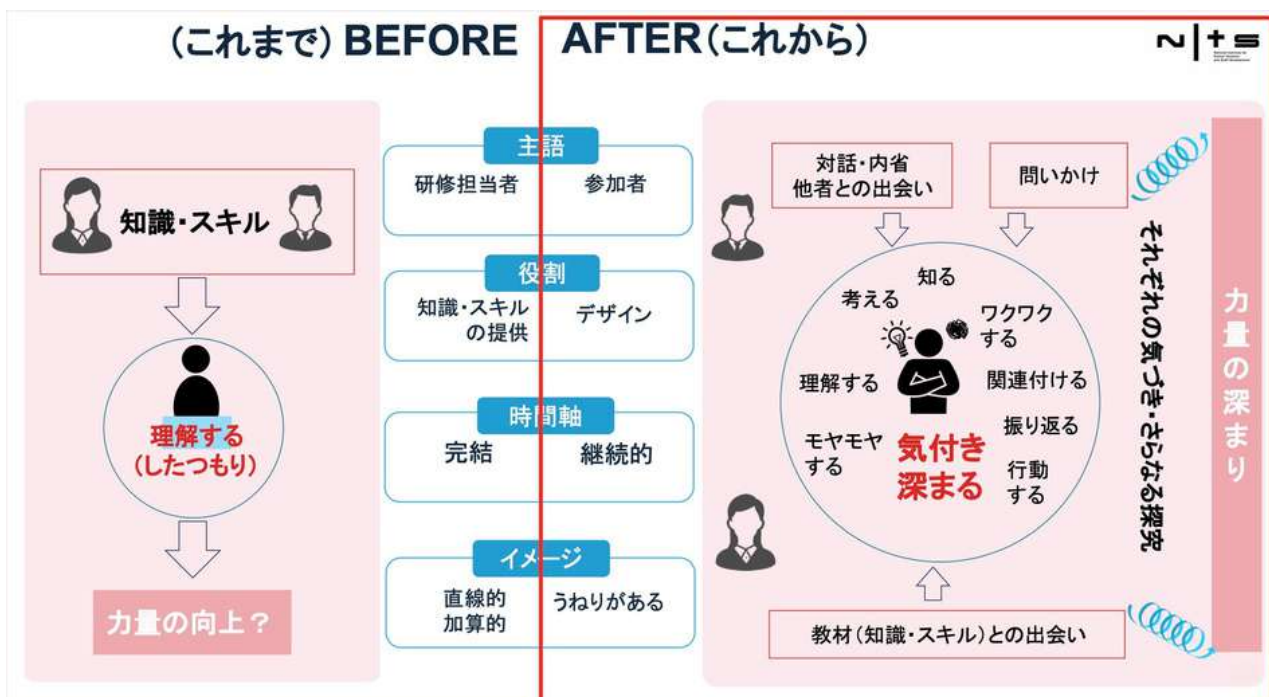


「わかった」から「考え続けたい」へ



今、求められている教師の学びは、「知ること」だけではなく、「考え続けること」です。

自らの実践を振り返り、他者との対話を通して、自分の考えや前提に気づき、新たな問いをもって、また実践に戻っていくこと。そのための「学びのあり方」を問い直す必要があります。



【引用】 R7マネプロ近畿版 9月。(独) 教職員支援機構

対話
内省
教材の工夫



(2) 「学び」をどうデザインする？

今、起きていること

現在、校内研修が、
「働き方改革の中で、形式化している」
「目的よりも方法が優先されている」
「『自分の学び』と実感しにくい」
といった課題を抱えているという声も多く聞かれます。

これは、方法そのものが悪くなったのではなく、方法が固定化される中で、本来大切にしてきた「問い」や「意味」が見えにくくなっているからだといえます。

校内の「学び」のデザイン

必要なのは、「どんな方法で学ぶか」だけではありません。

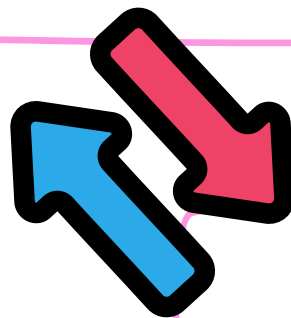
「私たちは、何を学びたいのか」
「どのような子どもを育てたいのか」
「そのために、何を大事にしてきたのか」
「この教科・教材を学ぶ価値か何か」

こうした問いに立ち返り、対話を通して言葉にし直していくことです。自分たちの言葉でつくり直していくプロセス自体が、教師の学びになります。

(3) 「やり方」と「考え方」そして「あり方」

「やり方」「方法」？

- その「やり方」通りにやれば、良い実践ができる？
- 「やり方」より先に、「考え方」＝「本質」を理解していないといけないのではないか？



「考え方」「本質」？

- 「考え方」＝「本質」は分かったけど、どうすればいい？
- 肝心の「やり方」がないがしろにされていない？

「やり方」と「考え方」を行ったり来たり

- 「やり方」を真似しながら、試行錯誤していく中で「考え方」＝「本質」が見えてくる。
- 共通する「考え方」＝本質がわかるから、汎用性のある「やり方」が見えてくる。



「ねやがわスタンダード」は、「やり方」「考え方」、そして「あり方」をともに問い直すための冊子です。

「やり方」「考え方」は両輪



「やり方」は取り組みやすいけど、その枠をはみ出すとうまくいかなくなります。一方、「考え方」に固執すると、どうはじめていいのか悩み、踏み出せないかもしれません。目の前の子どもたちにとってどうかと問いながら、「やり方」と「考え方」を行ったり来たりすることで、「新たな教師の学び」へとつながっていきます。

そして、「やり方」「考え方」は、運転している自分の「あり方」を通して、どう進むのか決まります。「やり方」「考え方」、そして「あり方」のバランスを大切に、学び続けていきましょう。

(4) 「新たな教師の学び」に向けた試行錯誤

私たちは、日々の実践の試行錯誤の中で、力量を深めています。その力量形成の過程を豊かにするための気づきを生むのが、校外研修であり、校内研修です。また、研修ではなくても、日々の同僚との対話の中からも、豊かな気づきが生まれます。そして、対話を育むためには、様々な工夫も必要です。



対話を育む相互授業参観～ねやがわスタンダードを共通言語として～

対話

- ① 緊張感のある場面（研究授業）を何度も通過する経験
→例えば、簡単な略案を書いて授業をたくさんの人に観てもらう。
- ② 同僚に授業を観てもらう経験
→可能であれば代案を示してもらったり、実演してもらったりする。
- ③ 同僚の授業を観に行く経験
→参観した授業に関しては、必ず感想等を伝え、お互いに学び合う。



「発問の善し悪しは、子どもの顔ですぐ分かるよ。発問したあとの子どもの表情をよく見てごらん。」
 「あの場面では、子どもに『なぜ』と問いかけたほうがよかったと思うよ。」
 「自分で課題を発見させるよいチャンスだったんだ。」



学びの様子を可視化したり、共有したりすること

学びの様子を可視化することで、自分自身の現状を把握・振り返ることができ、目的意識をもって次の学びへ向かうことができます。また、互いの学びの様子を共有することで、さらに深い学びへとつながります。

(例)

- 巻末のセルフチェックシートを使って、自身の強みや課題を明確にすることで、スキルアップへとつながります。
- 受講した研修の資料等を共有したり、校内で伝達研修を行ったりすることで、学びが広がります。etc.



時には自分のことを第三者の視点から見てみることも

自分の授業をビデオに撮り、表情、くせ、言葉遣い、口調、話すスピード、板書、立ち位置などをチェックしてみましょう。自分では気づいていない発見ができます。同僚からの助言も参考にして、改善していきましょう。



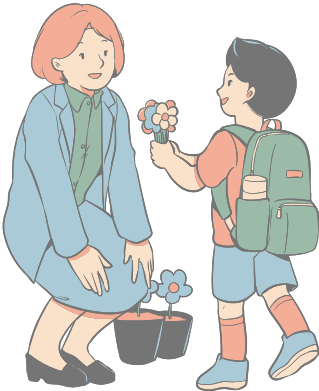
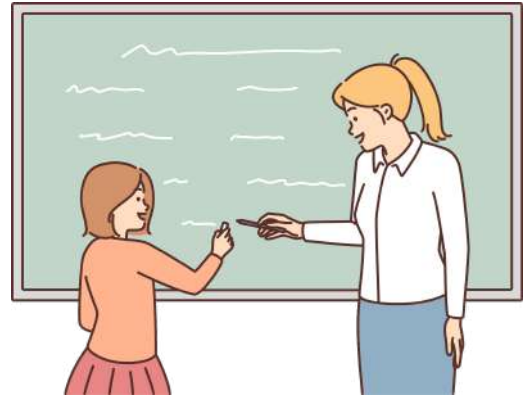


(1) 子どもたちに寄り添った指導

教師のあたたかな笑顔、豊かな表情は、子どもの思考を柔軟に

褒める・認める・励ます・自分で決定させることで、自信や自己肯定感を育みましょう。

- 肯定的評価を大切に！
「よく、考えたね。」「いい考え方だね。」
- 子どもの考えに感動すること！
「さすが！」「すごい！」「素晴らしい！」
- 子どもは、教師の表情をよく見ています！
笑顔で始まり、笑顔で終わる授業を。



- 子どもたちとコミュニケーションをとるためのチャンネルは、いくつありますか。
- 今日、何人の子供と話しましたか。
- 日々、子どもの様子を教職員どうして話していますか。
- 授業中の教室に入った時、立ち歩いている子どもがいました。どう声かけしますか。

子どもの考えに寄り添うことを指導の基本に

必要に応じて、毅然とした指導することも大切です。その際にも、子どもたちが自分は先生から大切にされていることを感じられるよう、心がけましょう。



(2) どの教室でも方向性を揃えた指導を

基本的な生活習慣を大切に～挨拶・返事・靴揃え～

授業は、日々の基本的な生活指導と関連

気持ちのいい挨拶、はっきりとした返事、きちんと靴がそろった下足箱。当たり前のことを当たり前にできるよう指導することが、授業改善にもつながっていきます。

挨拶

挨拶がきちんとできる子に育てることは、子どもの将来を見据えた大切な指導です。
(「いただきます」や「ありがとう」等も含みます。)

返事

返事がしっかりできるということは、主体性をもち相手の話をきちんと聞ける姿勢ができていているということです。

靴揃え

細かな部分へ気が向けば、さらにいろいろなことが見えてきます。自分の身の回りを整える習慣は、丁寧な生活につながります。また、日々の指導を丁寧に行っていれば、子どもたちのちょっとした変化にも敏感に気づくことができます。



- 就学前教育でも、日頃から友だちどうしや教師に挨拶ができるように意識づけをしています！
- 就学前教育でも、ビニールテープで線を引き、靴もそろえられるよう意識づけしています！

日常の指導は「やわらかく、自然な形で」

日常の指導については、一度に、短い時間で厳しく指導するのではなく、時間をかけて、少しずつ、かつ粘り強く取り組ませることで、自然な形で子どもたちを向上させていくことが望ましいです。

例えば、音読の合間に、「本を両手で持っていますか。」
「もうちょっと背筋をまっすぐ伸ばしてごらん。」等、優しく穏やかな声で具体的な指導をしたり、できているところを認めたりすることで、確実に改善します。

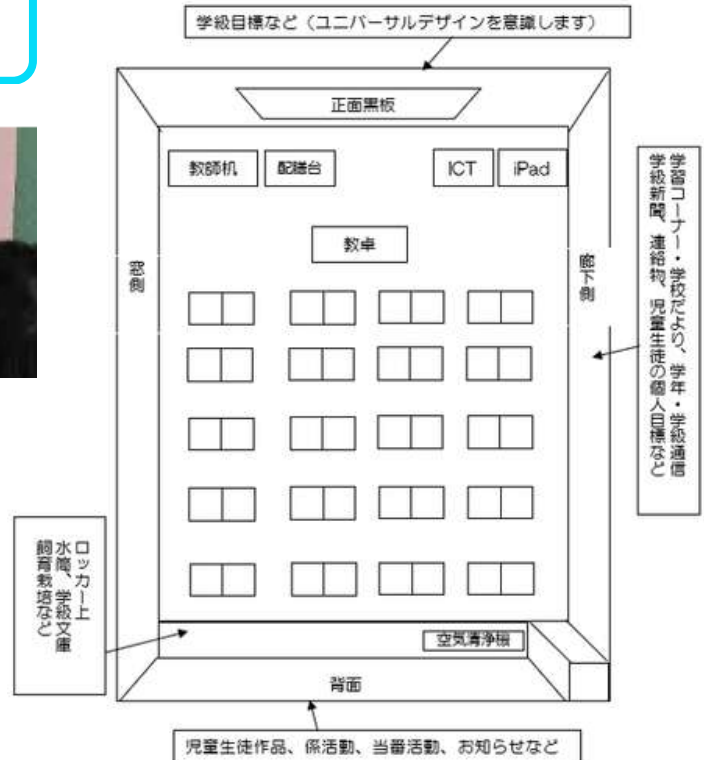
**(3) 指導のルールやレイアウトを問い直す****何を大切にして、何を揃えるのか ～指導の方向性の共有～**

同じ方向性で指導することが、子どもの安心感、保護者・地域からの信頼、落ち着いた学習環境、授業改善につながります。「同じ視点で指導することで、対話が深まる」「進級・クラス替えがあっても4月の最初から、授業がスムーズに始められる」「経験年数にかかわらず、子ども主体の授業が行える」ことが大切です。(教室環境、整理整頓の仕方等についても共有しましょう。)

教室レイアウト（例）



- 就学前教育でも、校区小学校と共通の掲示物を使って、進学への期待を持たせるとともに、円滑な接続へ取り組んでいます！



（４）掲示の工夫 ～教室全体をあたたかい雰囲気へ～

掲示を通して互いをよりよく知り、楽しい学校生活が送れるよう、掲示の目的や方法を教職員で共有しましょう。



掲示の基本的な考え方

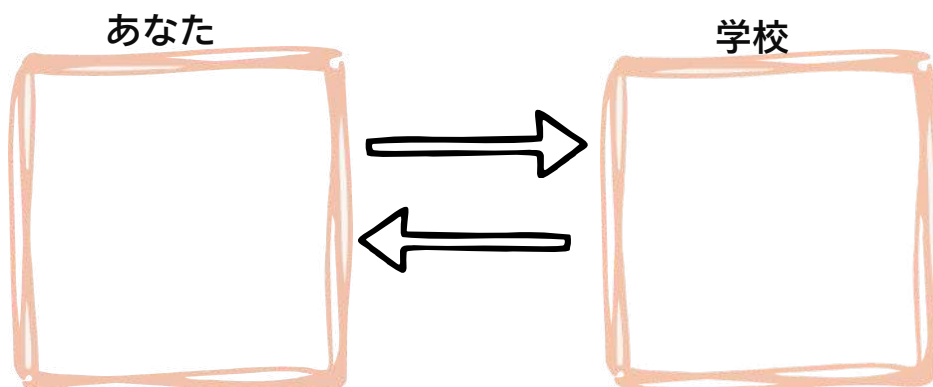
- 子どもを主体とした意図的な掲示をしましょう。
- 掲示を通して、互いのがんばりや成長をよりよく知る機会としましょう。
- 掲示物が単なる飾りとならないよう、定期的に更新しましょう。
- 教室前面の掲示物は、子どもにとって多くの情報となりすぎないようにしましょう。
- 子どもの作品を掲示する際は、比較・競争につながらないように配慮しましょう。



04 探究型の「ねやがわ授業スタイル」

(1) 「考える力」を育む子ども主体の授業へ

「授業づくりで、どんなことを大切にしていますか？」



授業づくりの方針を、全ての先生で共有し、みんなで同じ方向を向いて取り組むことで、改善の視点が明確になります。

コロナ禍を経て、社会は急速に変化しています。1人1台端末は文房具の一つとなり、単なる知識であれば、インターネットで検索をすれば、すぐ答えが見つかるようになりました。一方で、現在の社会は、環境、差別、高齢化、経済格差などの様々な課題が複雑に絡み合っています。

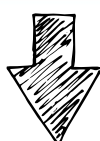
こうした決まった一つの答えがない状況において、自ら「課題を見だし」「考え」「解決しようとする」力が求められています。そのための手立てとなるのが探究型授業です。



寝屋川市のこれまでの実践と秋田・石川・福井視察からの学びを市内教職員・管理職・市教育委員会で協議し、整理した物が探究型の「ねやがわ授業スタイル」です。



【引用】諮問のポイント概要版「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(令和6年12月25日中央教育審議会諮問)」・文部科学省



「問題を見だし」「考え」「解決しようとする」
探究型の「ねやがわ授業スタイル」

ねやがわ授業スタイル

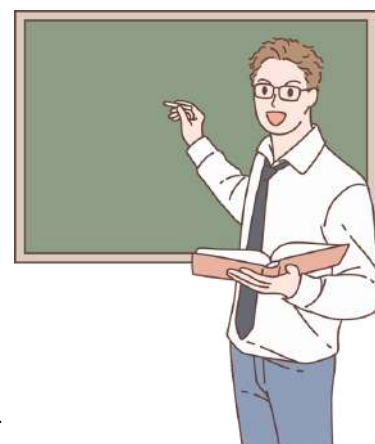


（２）学習の流れに関する指導のポイント

導入 ①出会う：課題の提示・めあての設定

課題・めあてを与えるだけでなく、子どもの興味・関心が高まる導入を工夫し、子どもが自ら見い出せるように

単元のゴールを意識させ、そのゴールに向けて本時では「何ができればいいのか」「何が分かればいいのか」を子どもに意識させます。それを通して、「～について考えよう」「なぜ～なのか知りたい」といった問いを子どもから引き出しましょう。ポイントは、矛盾のある問題、既習と未習事項が混じる問題、困惑する問題、煩雑さのある問題、生活にある身近な問題等を意識することです。



T：「前時、〇〇について学習しましたね。
～するには、次に何について考えればいい？」
S：「～について、考えてみよう！」
S：「なぜ、～なのかを考えてみたい！」

【タブレット】

資料の配付や、動画や画像による視覚的な導入に効果的！

※ 発達段階や場面によって、紙による資料の方がわかりやすいこともあるので、留意しましょう！



付けたい力（教科としての目標）を明確にし、授業のビジョンを持ちましょう。

学習活動を通して、どのような力を付けるのかというビジョンを教師が持つと同時に、子どもも「そのビジョン」を持つことができるようにしましょう。そして、そのビジョンをもとに子どもから引き出した「課題」や「問い」を「めあて・課題」として示しましょう。

課題の提示・めあての設定は、必ずしも授業冒頭で提示しなくてもはいけないわけではありません。授業内容に応じて、提示するタイミングを考慮しましょう。



問題

本時のねらいを達成するために、教師が与えるもの。課題を引き出すために提示するもの。

【例】マッチ棒で長方形を作ります。横は縦より1本だけ増やします。全部で何本のマッチ棒が必要でしょうか。

課題

問題に出合い、解決しようとした際に子どもたちから生まれる疑問。

【例】縦が何本の時でも、全部の本数を簡単に求めることはできないでしょうか。

めあて

本時の学習を通して、達成したい目標や目指す姿

【例】縦が何本の時でも、全部の本数を簡単に求める方法を考えよう。

それぞれの意味を意識して授業を！

展開 ②結びつける：見通しを持つ

一人一人の考えを引き出せるような、教材提示や発問の工夫をしましょう。

子どもの思考を予想し、既習事項をもとに子どもが自ら気づいたり、考えたりできるような教材や発問を工夫しましょう。また、考えを持っていない子どもの姿を想定し、補助発問を考えたり、ヒントカードを用意したりするなどの、個別の支援策も立てておきましょう。



展開 ③向き合う：解決活動【自力解決】

一人ひとりが自分の考えを書く時間を確保しましょう。

書くことは、自分の思考を確かなものにします。一人一人が自分の考えを文章、図、式などを用いて書く時間を確保するようにしましょう。この時、考えの根拠を明確にして書くことを繰り返し指導することが大切です。

【タブレット】

情報収集で活用
※学習内容に応じて、本や辞書と使い分けよう！



一斉授業だけでなく

- ★ ペアや班で意見を交換する。
- ★ iPadやホワイトボードを使って話し合う。
- ★ 付箋を使って話し合う。

展開 ③ つなげる解決活動【学び合い】

言語活動の充実を図りましょう。

ペアやグループ、学級全体で友だちと、考えを交流・共有し、自分の考えを広げたり深めたりする活動を、積極的に位置づけましょう。



「何のために」「どのような手順で」対話するのかを、子どもが明確に意識できるようにしましょう。

教師にやらされる話し合いではなく、子どもにとって聞きたいと思える対話の場になるように、対話の目的と手順を示しましょう。

【タブレット】

意見・ノートの交流
や説明で活用



- S：友だちの考えをもっと聞きたい。
S：取り入れたいな。
S：司会者と記録者などの役割を決めよう。
S：〇〇さんの考えは、なるほど思ったので、自分の考えに付け足してメモしよう！

終末 ⑤まとめる・振り返る・演習する

課題に対するまとめを、めあてに対する振り返りを、子どもの言葉で整理しましょう。

課題について、本時で学んだことを、教師が一方的にまとめるのではなく、子どもから引き出して、子どもの言葉で整理していきましょう。

【タブレット】

- 新聞づくりやスライドづくりで活用。学習内容に応じて、本や辞書と使い分けよう！
- 記録を残して、次の授業へつなげよう。手書きの場面も大切に！



「課題」と「まとめ」、「めあて」と「振り返り」は、対応していることが大切です！

次の学びにつながる振り返りにしましょう。

個々の気づきや、考えたこと、新たな疑問を「友だちに説明しよう。」「ノートに2～3文で書きましょう。」と投げかけ、自分の学びを振り返ることができるようにしましょう。それが一人一人の学びの深まりとなり、次の学びへの意欲につながっていきます。

また、1単位時間や単元の終わりだけでなく、内容のまとまりごとにも振り返る機会を設けるなど、意図をもって行いましょう。



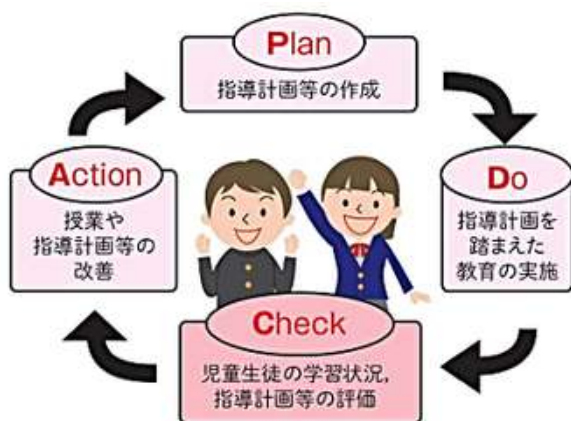
評価

「指導と評価の一体化」とは・・・

学校においては、計画、実践、評価という一連の活動が繰り返されながら、児童生徒のよりよい成長を目指した指導が展開されています。すなわち、指導と評価とは別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要です。このことを「指導と評価の一体化」と言います。

学習評価の考え方

- 「児童生徒にどういった力が身についたか」学習の成果を的確に捉える
- 教師が指導の改善を図る
- 児童生徒自身が自らの学習を振り返り、次につなげる
- 授業改善を進める上でも、学習評価を中核にPDCAサイクルを確立し、児童生徒一人一人の学習の成立を促す



【参考】学習評価の在り方ハンドブック 文部科学省国立教育政策研究所, 2020.

「指導と評価の一体化」を進めるために・・・

このような「指導と評価の一体化」を進めるためには、評価活動を評価のための評価に終わらせることなく、指導の改善に生かすことによって指導の質を高めることが一層重要となります。また、学習の評価を、日常的に、通信簿や面談などを通じて、児童生徒や保護者に十分説明し、児童生徒や保護者と共有することなども大切です。



評価問題だけでなく、ノートや作品からも子どもたちのよさや成長をたくさん見取れます。適宜、コメントを書いたり、声をかけたりしましょう。

評価のタイミング

子どもの学習状況の把握には、異なる方法や様々な評価者による多様な評価を組み合わせるとともに、評価を学習活動の終末だけでなく、事前や途中に位置付けて実施することを心掛けましょう。（机間指導における評価は、後述）

(3) 授業を充実させるポイント

熱中する授業を！

教師にとって、子どもがやる気に満ち、熱中して活動する充実した授業は、目指す理想像です。

熱中する授業の8要素

- ① 知的な授業
- ② ゲーム要素がある授業
- ③ 頭・心・体が動く授業
- ④ 「できない」→「できる」授業
- ⑤ 自分で考え、練り上げていく授業
- ⑥ 見通しが持て、何をするかわかる授業
- ⑦ 学びのつながりや自他の成長を実感できる授業
- ⑧ 教科や教材の価値を実感できる授業



当たり前の時間感覚を大切にしましょう

どんなに工夫した授業をしても、教師の時間感覚がいい加減だと、子どもたちの授業への集中力は切れてしまいます。

3つの時間感覚

- ① 開始時刻と同時に授業が始まる。
- ② 授業進度の時間管理に気を配り、メリハリをつける。
- ③ 時間通りに授業が終わる

分かりやすい発問を工夫しましょう

発問のねらい

導入

- ・ 学習経験（興味・関心・体験など）を調べるため
- ・ 復習のための
- ・ 興味・関心、意欲を高めるため

展開

- ・ 課題をつかませるため
- ・ ヒントや手掛かりを与えるため
- ・ 矛盾、対立、葛藤を生むため
- ・ 発想の転換を図るため
- ・ イメージを広げる
- ・ 多様な考えを引き出すため

終末

- ・ 問題整理のため
- ・ 抽象化、一般化のため
- ・ 定着、練習のため
- ・ 評価のため

よい発問の条件

- ・ 明確な「問い」であること
→意味や問いの方向性は明確か？
- ・ 計画的・意図的であること
→学習の流れに沿っているか？
- ・ 興味・意欲を呼び起こすものであること
→意欲を呼び起こすものであるか？
- ・ 子どもの実態に合っていること
→一人ひとりへ配慮ある発問か？
- ・ タイムリーであること
→機をとらえた発問か？
- ・ 工夫された発問でも、機を逸すると効果は半減します。また、沈黙が思考を促す事も！

発問3つのポイント

- ① 最初の発問が分かりやすく、活動しやすい。
- ② 意図的で、無駄な発問がない。
- ③ 意図が練られている

明確で意図的な発問を準備しましょう。特に最初の発問（初発問）は大切です！



授業でのテクニック

- 「間」が子どもの緊張感と、考えることの必要性を高める
- 考えさせるには、そのための時間を保障することが大切
- 授業に緩急をつける

発問した後、子どもからの反応がないと心配になり、更に続けて、問いかけてしまうことはありませんか？しかし、子どもは教師が話しかけている間は考えないものです。そこで「間」を生かすことが大切になります。

発問をより効果的にするテクニック

語りかけるもの

- 話を聞く準備をさせる
→子どもたちの目・手・姿勢
- 聞き取りやすい声の大きさ
→通常の話し声よりは大きく
- 話すスピード・抑揚
→普段よりややゆっくり、抑揚をつけて
- 表情・ジェスチャー
→いきいきとした表情、場合によっては身振り手振り
- 板書や資料を示しながら話す
→資料や写真などに関連させて

注目させるために

小さな声でゆっくりと話すと、子どもは一生懸命聞こうとする

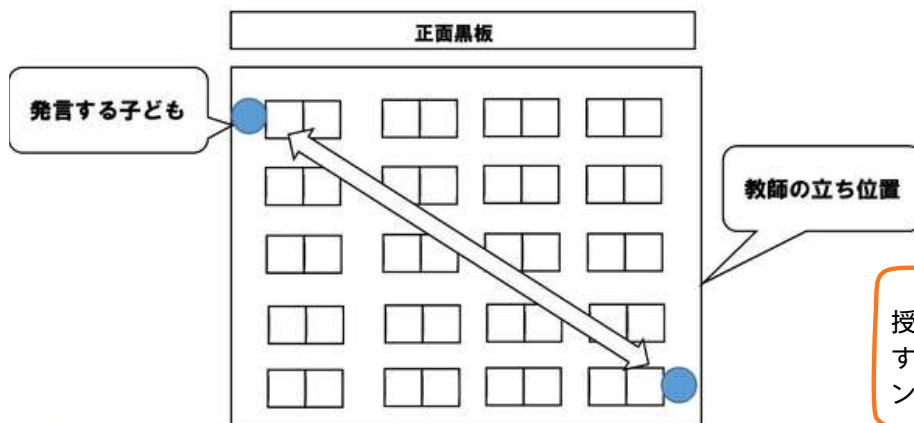
- こちらの思い入れが大きいところでは、声も大きく、早口になりがちなので気をつける。

声に出さずに問う

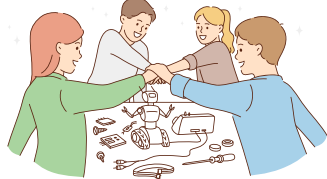
- ジェスチャーや無言の動作は、子どもの集中力を高める。

立ち位置を工夫する

- 相手に伝わる声で発表させたいときや、発表内容をより全体で共有させたいときは、子どもから離れるのも効果的。黒板の前にばかりいるのではなく、発言する子どもに対して教室の反対側に立ったり、教室の後ろ側に立ったり、子どもの実態に合わせて変化させる。



授業中の教師の立ち位置を工夫することは、指導力アップのポイント



間違いを楽しみ、「深い学び」が生まれる教室

子どもどうしの意見交流が、自分を振り返り、理解をより確かなものにします。

自分の意見を伝えたい授業にするには？

- 間違いを楽しむ教室の雰囲気づくり
- 子どもの心をつかむ教材の工夫
- あっと言わせる教材提示の仕方
- 時には笑いを引き出す話術も
- 子どもの「知りたい」を引き出す工夫

(参考：蒔田晋治、教室はまちがうところだ、子どもの未来社、2004。)



教師の意図的な失敗も効果的

- 先生が困っている状況
「あれ、先生も分からないみたいだぞ。」
- 先生がわざと間違える
「先生、その答え、間違っています。」など

子どもの誤答に対しては

- 「正しい」「間違い」だけに話題を焦点化しないようにする。
- その論理に共感してみる。「なるほど、この考えに説得力があるね。」の上で、誤答から学ぶという姿勢を大切にする。子どもの心をつかむ教材の工夫
- 貴重な考えを出してくれたことに感謝する

35人の子どもがいれば35通りの考え方があります

正解にも間違いにも、その子どもなりの論理があります。その考え方を知り、どのような手立てを講じるのかを考えていくことを「誤答分析」といいます。

授業の達人は、よく誤答分析の達人でもあると言われます。子どもたちの予想される反応とそれに対する適切な対応を準備できるからです。反対に、予期せぬ子どもの反応に動揺して、いい加減な対応をしてしまうと、子どもの信頼を失いかねませんので、気を付けましょう。



熱心な話し合い（聞き合い）・学び合いでお互いに高め合う授業

それぞれの考えや意見を効果的に共有！

子どもたち1人ひとりの考えや意見を、リアルタイムで共有すること、考えが深まります。



話し合い（聞き合い）・学び合いの意義

- より主体的な態度を身に付けることができる。
- 自分の考えをより確かなものにすることができる。
- 相互に刺激し合い、思考を活発にすることができる。
- 新しいものの見方や考え方を作り出すことができる。
- 集団として創造的な活動を行うことができる。

話し合い・学び合い「こんな時どうする？」

発言が一部の子どものみに偏り、
一人ひとりに深まりが見られない

- 話し合いを踏まえ、一人一人が考えをまとめる時間を設け、意図的な指名を行う。

焦点があいまい。深化・発展の糸口が見えない

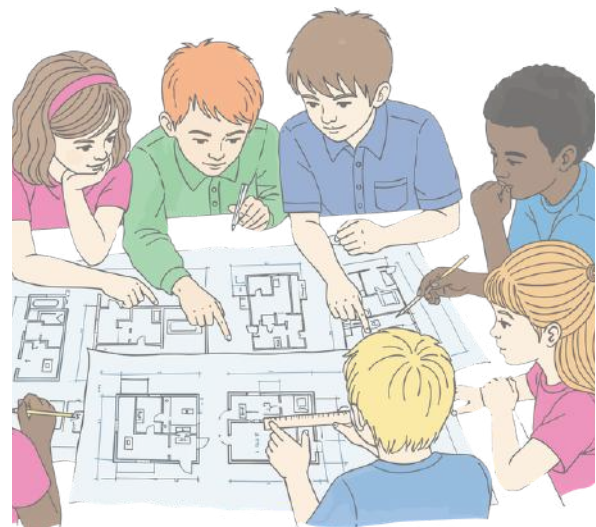
- 本題が何であるかを押さえたり、それまでの議論を整理したりする。
- 発想や場面を変えた助言をする。

話し合いがうまく進まない

- 話し合いのゴールを明確にし、担当の子どもたちと事前に打ち合わせをする。

意見をうまく表現できなかつたり、言えなかつたりする

- 機会をとらえて、子どもの考えを聴く。
- 話し合いの良さや大切さを伝える。



留意点

- 助言が頻繁で、話し合いを分断することにならないようにする。
- 話し合いに過度に完全さを求めない。
- 大勢の子どもから意見が出るような指導・助言を心掛ける。
- 「話し合ったこと」が意味のあることと実感できるような指導・助言を心掛ける。
- 「話し合い」を通して、その方法や意義を教え育てるという心構えを持つ。



タイムリーな助言で子どもを支援を

できるだけ自力解決または集団解決するために援助し、子どもと共に考えるというスタンスを大切にしましょう。

自力解決・集団解決のための支援

子どもとともに考えるスタンスで！

問題点を分析する

- 「分かっていることは何だろう。」
- 「今考えることは何かな。」
- 「図（表）に表して整理できないだろうか。」

新たな視点から問題にアプローチする方法を考えてみる

- 「もし、～だったらどのようなになるだろうね。」
- 「この方向から考えることができそうだね。」



友だちの考えがヒントになる場面を

問題が解決してから発表させるより、

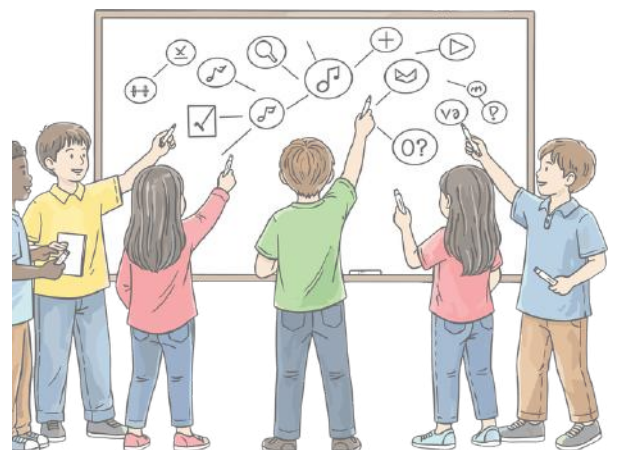
むしろ思考・判断の途中の段階で発表させる

- 自力解決にこだわる、他の考えに依存しようとする、など多様な子どもがいるので、そのタイミングには注意が必要。
- 「〇〇さんの考えと◇◇さんの考えからは～ということが言えそうだね。」
- 「このように考えると、～はどうなるのだろうか。」

グループ活動の場面を設け、

話し合いを活性化させる問いも有効

- 「AグループとBグループの似ている部分、異なる部分は何かな。」
- 異質・同質のグループ編成を工夫し、生かすことも有効。



子どもがつまずいた時に、すぐにヒントや助言を与えてしまうのではなく、ヒントを含んだ課題提示・環境づくりなど、子どもが自ら問題の解決の糸口に気づくことができるような配慮が必要です。

タイムリーな指導・援助には事前の準備が不可欠（教材研究の充実）

- 予想される子どもたちの反応を類型化しておく。
- 反応の根拠となる部分の分析と、その分析に基づいた支援を準備しておく。
- 日頃の子どもの反応の傾向をもとに、意図的な指名の準備をしておく。



学年や教科の枠を越えて、小さなことから考えが深まる助言の在り方などを議論しましょう。



がんばった道筋が見える板書

音声は消えるが、板書は残る。「残る」・「見える」ことを最大限生かしましょう。

板書の意義

音声言語の補助手段

- 正確かつ明瞭に伝達することが可能
- 留意点を活動中も意識させ続けることが可能

集団思考の形成機能

- ねらいの共有化、課題の明確化
- 比較や概念の関連付けなど思考のヒント
- 子どもの思考に沿った加除訂正

理解・定着機能

- 概念や知識の整理や構造化
- 学びの流れ、概念や知識の習得過程を振り返る手立て

【タブレット】

板書の写真をタブレットで撮影し、次時の導入に活用したり、教職員間で共有したりすることで、授業改善へ！



板書とノート指導を連動させることで、ノートが子どもたちの学習に役立つものになります。子どものノートをイメージして、板書を考えましょう。

よい板書を目指して！

板書の基本

- 楷書で、正確に丁寧に！
- 学年や実態に合った漢字を使用！
- 文字の大きさは、一般的には12CM四方！
- 見えやすく！照明や日光、文字の色や囲み、色の見え方に困難を感じている子どもへの配慮を！
- 消し方にもひと工夫、要点のみ残して焦点化を！

子どもの思考の活用

- 子どもの考えや方法を、授業で生かすことが重要
- ロイロノートで意見を集約したり、カードや小ボードに記入させ、発表させた後、提示したりするなど、全体で共有する工夫をしましょう。

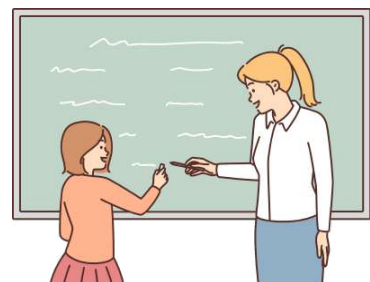
子どもと共に創り上げる板書

- 子どもを黒板の前で活躍させる。
- できるだけ子どもの言葉を活用する。
- 板書内容、書くタイミングを計画する。

繰り返し学び直す仕掛けを

授業中に表出した子どもの考えや方法などの板書内容を、教室やホール等に掲示して、以後の学習に活用する取組が実践されています。

板書はその時間で消えてしまいますが、この方法により、単元を通しての活用も可能になります。



板書のルール（例）

- ・ 本時の「課題」「めあて」を明示する。「課題」「めあて」に対する、本時の「まとめ」「振り返り」を授業の終末に明示
- ・ 終末の「まとめ」に結び付くよう、授業を逆算して組み立て（バックワードデザイン）、授業の流れ・導入・「めあて」「課題」を考える。
- ・ 子どもたちの考えの提示は、電子黒板や小ボード等を利用する。
- ・ 全校で統一した黒板プレート（「課題」「めあて」「まとめ」など）を使う。また、文字の大きさや色チョーク、記号・マーク等の使い方を工夫する。

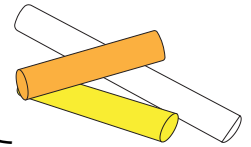
チョークの基本（例）

★赤チョーク・・・・・・★マークを書いて、課題（めあて）を囲む。

■青チョーク・・・・・・■マークを書いて、まとめを囲む。

見えにくいので、文字には使わない。

◎黄チョーク・・・・・・◎マークを書いて、キーワードなどを示すときに使う。



赤や青は視認性が低く、見えにくい児童生徒もいます。蛍光色や他の色を用いる等配慮してください。なお、ここでは一般的な色として例示しています。

（例）算数、数学の板書

日付 ○月 ○日(○)	
★めあて ○○○○について、○○○○を考えよう。	子どもたちの考え
問題・課題 1つの辺が...	
見通し	■まとめ ○○○○は、○○○○することで求めることができる。
	練習問題
	振り返り ※観点を示す

$$1 + 2 = 3$$

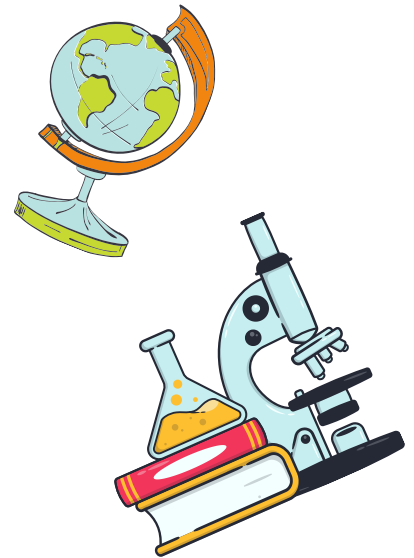
（例）国語の板書



日付 ○月 ○日(○)	
作品名・題材 ○○○○○○	作者・筆者 ○○○○
★めあて 山場の前と後での、○○○○の思いの変化をとらえよう。	情景描写
後	山場
前	
思い	
振り返り ※観点を示す	■まとめ ○○○○や、○○○○という行動から、○○○○という思いに変わったことがわかる。

(例) 社会の板書

日付 ○月 ○日(○)		資料②	
★めあて	〇〇〇〇について、理解しよう。	資料③	
課題	〇〇〇〇が起きたことは、その後の国際情勢にどのような影響を与えたのだろうか。	※子どもたちの考え	
写真A	資料①	■まとめ	
※子どもたちの発見や考え		〇〇〇〇が起きたことで、〇〇という影響を与えることになった。つまり、〇〇〇〇は●●である	
		振り返り ※観点を示す	



(例) 理科の板書

- ここに示しているものは(例)ですので、各校の実態に応じて調整してください。
- 各教科の板書については、教科の特性に合わせた工夫が必要です。



日付 ○月 ○日(○)		結果	
★めあて	〇〇〇の性質について調べよう。	結果表	
課題	〇〇〇になると出てくる大きな〇〇の正体は、何なのだろうか。	考察	
予想	※子どもたちの予想や考え	※子どもたちの考え	
実験	※実験の流れ	■まとめ	
図①	図②	〇〇〇〇は、〇〇〇〇が変化したものといえる。	
		振り返り ※観点を示す	

丁寧なノート指導をしましょう

ノート指導は、「子どもをよく見ること」「見えないところを見ること」につながります。

ノートの意義

子どもの立場では…

- 学習の理解が深まり、定着に役立つ。
- 考えが広まったり、深まったりする。
- 自分の考えが整理され、説明するときにも役立つ。
- 復習時の参考書や資料として活用できる。(学びの連続性)
- 自己評価ができる。

教師の立場では…

- 子どもの学習状況を把握し、効果的に学習を進めることができる。
- 子どもとの良好な人間関係の構築に役立てることができる。





ノート指導での支援・対応（例）

書くことが遅い子どもへの支援（例）

- 書き始めが遅れていることがあるので、注意喚起する。
- 書くことが極端に遅い子どもには、ノートに赤鉛筆で薄く書いてあげたり、見本を提示したり、作業量を調節したりする。
- できたら褒めること！

早く書き終えた子どもへの対応（例）

- 別の解決方法を考えさせる。
- 発表準備をさせる。
- 板書をさせる。等

書くことが遅い子どもへの支援、早い子どもへの対応について

「書くことが遅い子どもを待っていると、早く書き終わった子どもが遊んでしまうし、かといって遅い子どもをおいていけないし…」

子どもによって書くスピードは異なります。その差が大きくならないように、日頃から子ども一人一人の実態を把握し、手だてを含めた授業を組み立てていくことが大切です。

よいノート指導を目指して！

ノート指導の基本

- 子どもの発達段階に適したノートを準備する。例えば、マス目の大小、罫線のみ等。
- 必ず記入する事項を明確にする。
▶学習日時 ▶めあて
▶考え（自他） ▶振り返り 等
- ノートガイダンスを実施する。
- 書く内容や書き方のルール等を確認
- 小学2年生以上は、基本的に見開き2ページを利用することが望ましい。（小学1年生は1ページも可）

子どもの思考を表現するために

- めあてや学習課題等は赤ペンで囲む。
- 間違い直しは、消しゴムで消さずに、近くに訂正を記入させる。
- 自分の考えの表現方法は、
【1・2年生】絵、言葉
【3・4年生】絵、図、線分図、言葉
【5・6年生及び中学生】
絵、図、線分図、数直線、言葉、式、思考ツール等

- 上記は目安として示しているが、一人一人の発達段階や理解度に応じて使い分ける。
- 小学校高学年以降は、自分の工夫を書き込み、自分なりの参考書となるような指導を。
- 授業でのノート指導が、「内容を整理する力」「まとめる力」等を育て、それらが家庭学習へつながるように。
- 小中の連携で、継続したノート指導の実現に結び付けて。



意図的な机間指導をしましょう

机間指導は、1人ひとりの学びを保障し、授業を活性化するための時間です。宝探しのつもりで、机間指導を行いましょう！良い考え・意見等を見つけてクラス全体へ伝えることで、思考が滞っている子どもへのヒントになります。



机間指導の意義

クラス全体の学習状況を把握

- 学習に集中しているか。
- 課題の意味を理解しているか。
- 時間はどの程度かかりそうか。

指名・練り合いのプランニング、指導プランの修正

- 意図的な指名で進める際には、その順番はどうしたら効果的か考える。
- 自由発言で進める場合、ぜひ取り上げたい考えはどれかを選ぶ。
- 場合によっては、机間指導しながら、発表者を指名（声かけ）しておく。

個々の子どもの学習状況の把握（指導と評価の一体化）

- 評価規準に基づき、「努力を要する」と判断される子どもへの手だてを講じる。
- 「学習の高まり、深まり」の見られる子どもへは、次なる思考を促す声かけを行う。
- 「主体的に学習に取り組む態度」「思考・判断・表現」については、机間指導時に学習状況をつかむ。



机間指導のポイント

机間指導は個別指導のチャンス

- 支援の手立ては事前に準備しておく。
- 助言は3回に分けるぐらいの気持ちで支援を行う。
- 特定の子どもだけにつきっきりにならないようにし、できるだけ多くの子どもに声をかけるようにする。（ただし、本時で特に支援を手厚くする子どもを設定することもあり得る。）

評価のチャンス

- 丸付けをしたり、コメントを書いたりし、子どもの良さを評価する。
- 取組状況を適切に見取り、個に応じた声かけをする。
- 知識・技能だけでなく、どのように学習に取り組んでいるのか、主体的に学習に取り組む態度についても見取る。

チーム・ティーチング（TT）において

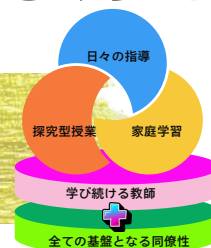
- 本時のねらいを確認する。
- 授業で子どもがどのような力を付けて、最終的にどのような姿になればいいのか、イメージを共有する。
- それぞれの役割を明確にする。
- 机間指導においても、特別な支援を要する子どもへの対応、担当する指導場面などの分担等を明確にする。
- 授業内での子どもの気持ちに添った発言や役割交代も効果的！
- 授業の流れを分析し、T2の介入の場面を意図的に設定する。

座席表の活用

- 一人ひとりの子どもの学習状況を把握し、指導に役立てるために、座席表の活用が効果的。ただし、座席表への記入が目的化しないように。また、記号を工夫するなど、簡略化する。
- TTでは相互に情報を交換しやすいよう、共通の視点で行う。
- T1、T2のコンビネーションも大切。

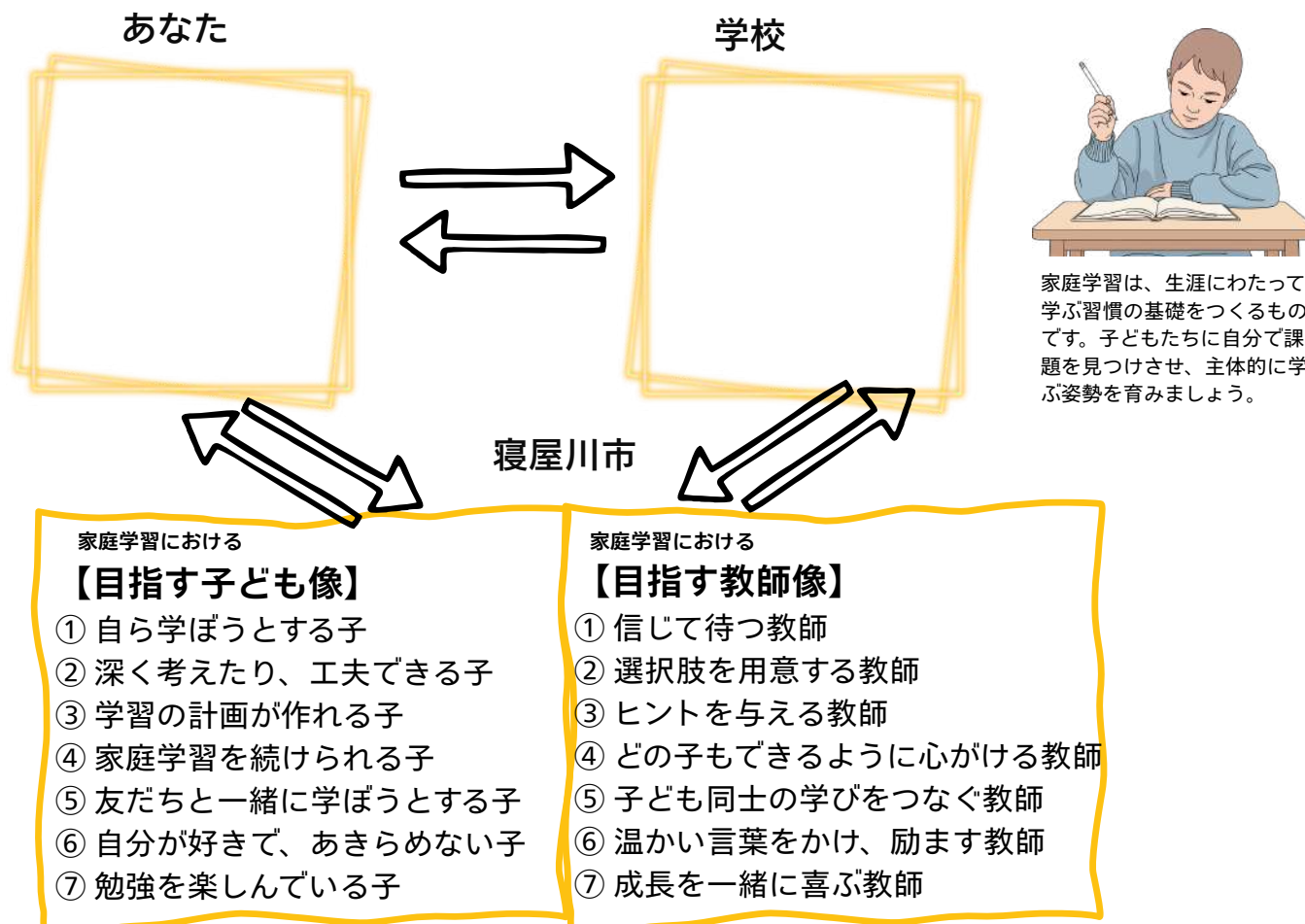
05 家庭学習で生涯学び続ける力を

(1) 家庭学習は何のため？



「家庭学習で、子どもたちにどんな力をつけたいですか？」

「家庭学習で、子どもたちのどんな姿を目指したいですか？」



参考：伊垣尚人，自主学習ノートの作り方，ナツメ社，2012。

(2) 家庭学習ノートの取組

家庭学習ノートの取り組み方

- 小学1年生の夏休み頃から、徐々に自主的に行う家庭学習に取り組んでいきましょう。
- 週1回程度からスタートしましょう。中学生は、学校からの課題を1ページ、自分で取組をする課題を1ページとするなど量を設定したり、40分間、50分間と時間を設定したりするなど、子どもたちの実態に応じて取組を進めましょう。
- 見開き2ページを基本としましょう。
- できたことを褒め、認め、励ましながら、自分の学びを調整できるよう、助言しましょう。



家庭との連携・協力

家庭学習の手引き等を活用し、家庭への連携・協力を求めましょう

時間の確保

- 各家庭で話し合い、習慣づけとなるような時間設定をしてください。

環境づくり

- ながら勉強（テレビを見ながら、お菓子を食べながら、音楽を聴きながら…）では、効果が上がりません。落ち着いた環境で学習できるように工夫をお願いします。

見届け・励まし

- お子さんがやる気をもてるような声かけをお願いします。おうちの人がコメントを書いてあげたり、スタンプを押してあげたりすることもいいことだと思います。

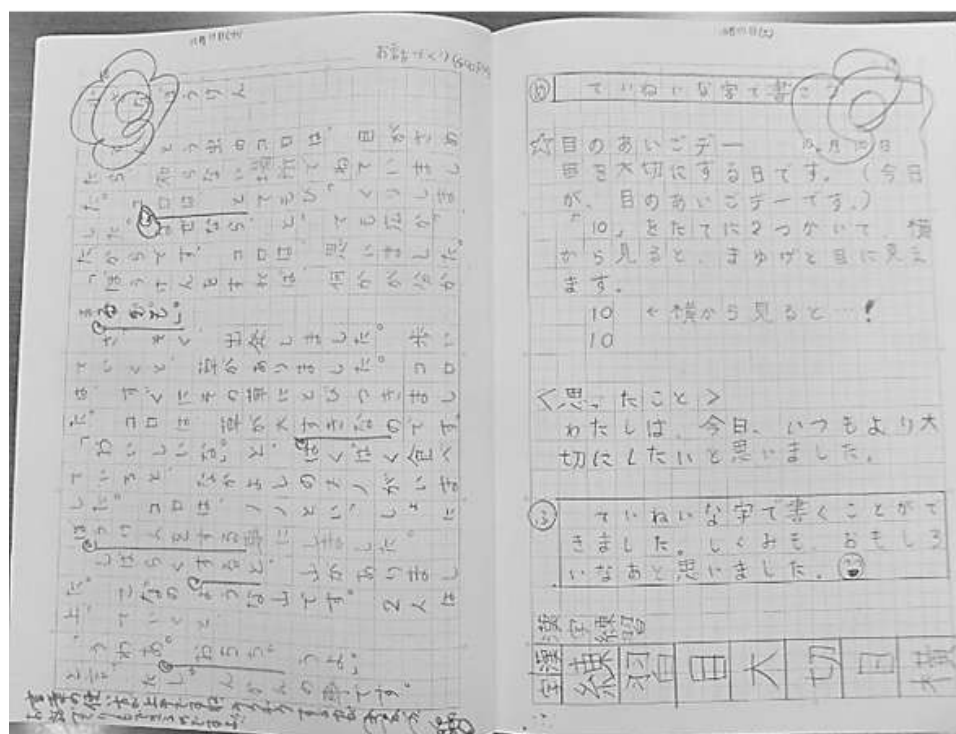


子ども一人一人とのかかわりを大切にし、信頼関係を構築することにつなげることが大切です。家庭学習ノートは、教員のコメントを書いて返却するようにしましょう。サインやスタンプだけで終わるときも、内容を読んだ感想等を伝えたりして返却するようにしましょう。

夏休み等の長期休業中の家庭学習ノートについては、花丸やスタンプ等を使い、最後のページにコメントを書くようにしましょう。その際も、「たくさんあるから、最後のページにまとめてコメントを書いたよ。」と子どもに伝えるなど、子どもたちの気持ちに寄り添った関わりを大切にしましょう。



（例）秋田市の子どもの家庭学習ノート（自主学習ノート）



家庭学習ノートでも「めあて」や「ふりかえり」が書けるよう、指導しましょう。

(参考) 寝屋川市の小中学校の事例

【市事例① 自主学習ノートのすすめ】

「校内前掲示板を活用した

自主学習ノートへの意欲向上」

学校全体で「家庭学習のすすめ」と「自主学習ノートのススメ」等の掲示物や配布物を作成し、どの学年でも取り組みやすい工夫されていました。

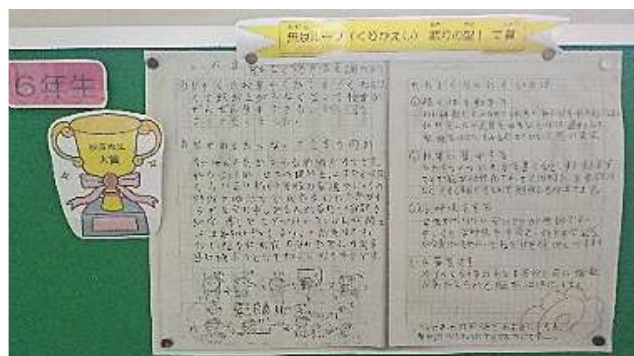


校内掲示板

取組

- ・ 3～6年生が自主学習ノートに取り組み、週1回提出
- ・ 家庭学習ノートを各クラスや各学年廊下等で掲示
- ・ 毎月各クラス1名の家庭学習ノートをA3サイズでカラーコピーをして、校長室前掲示板に掲示。それを、校長先生と教頭先生に見てもらい、掲示された全ての家庭学習ノートに「〇〇賞」とつけ、その中から更に「校長賞・教頭賞」を選定

各クラスの児童の家庭学習ノートを全校児童が見ることで、「こんな家庭学習ノートをやってみよう」と刺激を受けて、意欲的に取り組む子どもたちが増えてきたそうです。



校長賞

【市事例② 自主学習グランプリ】

「自主学習ノートに継続して取り組んだ一人の児童の変化」

この学級では、自主的に学ぶ力を育成するため、家庭学習ノートの取組が行われていました。担任の先生は、令和元年10月末に秋田訪問に参加され、現地で学ばれたことを生かして、11月から自主学習グランプリに取り組みました。写真は、一人の児童の家庭学習の変化を追ったものです。先生の丁寧なご指導もあり、児童の自主学習の内容が、明らかに改善しているのが見て取れます。初めは授業時間を使って指導、その後自主学習へ移行しています。

取組

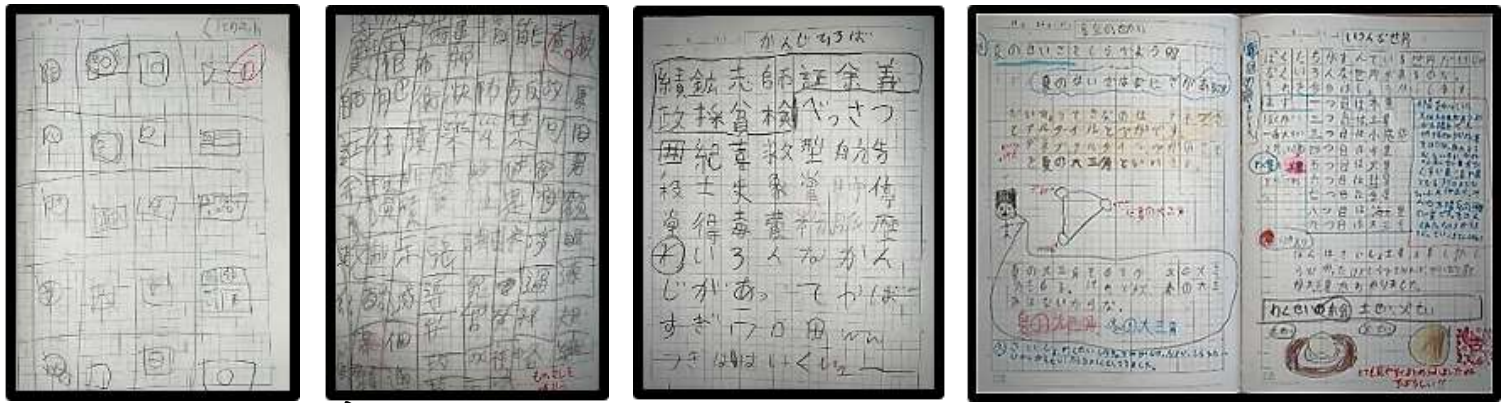
- ・ 内容は自由とし、時間は45分間で、ノート見開き2ページを使用
- ・ 「めあて」「振り返り」を必ず書く
- ・ 良かったものは表彰・掲示

評価の観点

- ・ まとめ方（見やすいまとめになっているか）
- ・ ていねいな字（初めから終わりまで）
- ・ オリジナリティ（教科書などの写しではなく、自分の言葉でまとめられているか）

採点・表彰

- ・ 点数の高かった児童を表彰（金賞・銀賞・銅賞）
- ・ 入賞者の良かったところを一人ずつ、ノートを電子黒板に写しながら、説明するのがポイント



4月

6月

9月

11月



校内掲示板

自主学習ノートを継続していくことで、努力や成長が「見える化」されます。

「見える化」することで、努力や成長を本人・教師・保護者で共有することができます。また本人の自信にもつながります。



中学校区での家庭学習の取組を共有し合う校内掲示板

校種を越えて、家庭学習を交流するために、校区の小中学校の家庭学習を掲示しています。

小学校同士で見合うことで、お互いに高め合うことにつながるとともに、中学生の家庭学習を小学校に掲示することで、小学生は「こういうノートを作ればいいのか」と学ぶことができます。

そのような、校種をこえた子どもたちどうしがブラッシュアップできるような仕組みを構築しています。

【参考】寝屋川市 家庭での生活習慣リーフレット



小学校版



中学校版

巻末資料①「寝屋川市ユニバーサルデザインの授業づくりシート」

ユニバーサルデザインの授業づくり			
環境整備・共通認識	1	教室の学級文庫、ロッカーの中、机イスの整理整頓ができているか？ゴミはおちていないか？	
	2	掲示物・装飾などが、気が散らないよう工夫しているか？	
	3	黒板周りが整理できていて、見やすいか？（黒板がきれいに消えているか）	
	4	先生のを勝手にさわらせていないか？（「私物」と「公共のもの」の区別ができているか）	
	5	友だちどうしの助け合い（アドバイス）になっているか、注意のし合いになっていないか？	
	6	トイレに行きたくなった子の指導は適切か？	
授業の流れの中で	7	時間どおりに始められているか？	
	8	授業に遅れてきた子どもの指導は適切か？	
	9	時間の初めに、この時間のねらいと流れを明確にしているか？	
	10	準備物を出すタイミングは適切か？	
	11	授業の導入に工夫を凝らしているか？	
	12	忘れ物をした子どもの指導は適切か？	
	13	1回の指示は短い？	
	14	指示は静かになってから出しているか？	
	15	指示は数字などがあり具体的か？	
	16	指示は肯定的表現を使っているか？	
	17	指示ができたかどうかを確認しているか（やらせきっているか）？	
	18	課題を始めるとき、何をどれだけすればいいかを具体的に指示しているか？	
	19	早くできた子どもが飽きないように、何かを工夫しているか？	
	20	失敗が起こらないように工夫をしているか？失敗しても大丈夫な工夫をしているか？	
	21	片づけを授業時間に、みんなでやる工夫をして、やらせきらせているか？	
授業の内容・技法	22	まとめをして、次の授業の予告をしているか？	
	23	時間どおりに終わっているか？	
	24	15分ごとをめやすに内容や活動形式を変化させているか？	
	25	何か身体を動かす活動を取り入れているか？	
	26	空白の時間ができていないか、子どもを待たせていないか？	
	27	授業中の声に、トーンの変化や緩急、強弱などがあるか？	
	28	授業の中に、緊張感を持たせる場面がちりばめられているか？	
	29	子どもから出てきたものに、すぐその場で評価しているか？	
	30	普段できていない適切な行動ができていたとき、必ずほめているか？	
	31	視覚情報を使ったり、楽しい小道具を使ったりしているか（パソコンの活用を含む）？	
	32	順番に積み重ねて全体を説明したり、まとめから細部を説明したりしているか？	
	33	授業に子どもの見通しとなるくらいの型（パターン）があるか？	
	34	その中でも、変化を持ち込んで、子どもを飽きさせていないか（ゲーム的要素、グループ活動）？	
	35	板書の量は適切か、大事なところが目立っているか（色分けやアンダーラインなど）？	
	36	視覚情報と聴覚情報は同量になっているか？	
	37	ノートを写すのに時間がかかる子どもに、配慮・工夫しているか？	

巻末資料② 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」

小学校に就学する子どもたちは、幼稚園・保育所・認定こども園・家庭などでの様々な体験や学習を経験し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を育まれています。小学校1年生をゼロのスタートではないと意識することで、就学前教育からの学びを活かした小学校教育が展開され、子どもたちのよりよい成長へとつながります。

①健康な心と体	幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
②自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
③協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
④道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
⑤社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
⑥思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
⑦自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
⑨言葉による伝え合い	先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
⑩豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

〔参考：幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針〕

巻末資料③ **ねやがわスタンダード セルフチェックシート**

項目	1 学期	2 学期	3 学期
01 すべての基盤となる「同僚性」			
同僚との日々のコミュニケーションを大切にしていますか			
日常的に子供の情報共有をしていますか			
受容的・支持的・相互扶助的な同僚性がある職場となっていますか			
02 学び続ける教師 ～「わかった」より「考え続けたい」へ～			
授業を見てもらう機会を持ちましたか			
授業を見に行く機会を持ちましたか			
同僚からアドバイスを受ける機会がありましたか			
主体的な学びとなるよう工夫していますか			
03 日々の指導			
笑顔で子どもたちに接していますか			
挨拶・返事・靴揃え等、基本的な生活習慣の指導を大切にしていますか			
学校全体で教室のルールやレイアウトについて話し合い、共有していますか			
04 探究型の「ねやがわ授業スタイル」			
学習の流れについて、校内で共有し、統一した指導が行われていますか			
子どもたちのやる気を引き出す工夫をしましたか			
当たり前の時間感覚を大切にしていますか			
分かりやすいよう、発問を工夫していますか			
間違いを楽しむことができるような雰囲気を作り出す工夫をしていますか			
熱心な話し合い、学び合いのある授業をつくるための支援をしていますか			
タイムリーな助言で子どもを支援していますか			
授業の道筋が見える板書をこころがけていますか			
丁寧なノート指導を行っていますか			
意図的な机間指導をこころがけていますか			
05 「家庭学習」で生涯学び続ける力を			
家庭学習ノートに取り組んでいますか			
授業と家庭学習を関連付けて行っていますか			
子どもたちが自己の成長を感じることができるよう工夫していますか			

㊦ がいは

㊧ っぱり、子どもたちの幸せ

㊨ くしゅうルールや指導法を

㊩ きあいあいと話し合おう

